アドミニストレーション　第 29 巻第 2 号　(2023)　ISSN 2187-378X

被災地域の地域コミュニティの現状と課題
～人吉市におけるフィールドワークを通して～

高濵　信介

第１章　序論
第２章　地域コミュニティについて
第３章　令和２年７月豪雨災害後の人吉市の現状について
第４章　人吉市中心部の地域コミュニティの現状について
第５章　鍛冶屋町の取組事例
第６章　七日町の取組事例
第７章　おくんち祭における紺屋町・鍛冶屋町・九日町の取組事例
第８章　考察
第９章　結論
謝辞、参考文献、参考資料

（概要）
令和２年７月豪雨災害により人吉市では球磨川や支流の氾濫により市内中心部で過去に例のない大規模な浸水被害が発生し、甚大な人的・物的被害が発生した。さらには長引くコロナ禍による活動自粛により夏祭り等の地域行事が行われず、地域住民が集う機会が失われている。
今回、熊本県立大学令和４年度地域おこしスタートアップ事業において、人吉市から「地域コミュニティの活性化持続化と地域行事」という地域課題の提示があり、豪雨災害とコロナ禍による地域コミュニティへの影響について調査研究を実施した。調査にあたっては人吉市中心市街地の７つの町内会の協力のもと、人吉高校３年生の自主研究グループ６人と合同でフィールドワークを行った。この論文では、研究活動を通して見えた被災地の地域コミュニティの課題と活性化の方策について検討を行う。

キーワード：令和２年７月豪雨災害、コロナ禍、地域コミュニティ、担い手不足問題

第１章　序論

1.1　研究の背景

人口減少や少子高齢化の進展は我が国が直面する大きな課題である。これらに起因する問題の一つとして地域コミュニティの機能低下が挙げられる。2015 年度の国土交通白書では、「人口減少は、地域コミュニティに与える影響も大きい。町内会や自治会といった住民組織の担い手が不足し共助機能が低下するほか、地域住民によって構成される消防団の団員数の減少は、地域の防災力を低下させる懸念がある。また児童・生徒数の減少が進み、学級数の減少、クラスの少人数化が予想され、いずれは学校の統廃合という事態も起こり得る。こうした若年層の減少は、地域の歴史や伝統文化の継承を困難にし、地域の祭りのような伝統行事が継続できなくなるおそれがある。このように、住民の地域活動が縮小することによって、住民同士の交流の機会が減少し、地域のにぎわいや地域への愛着が失われていく。」と指摘されている。また 2020 年以降に感染拡大した新型コロナウイルスの影響により人々の外出機会が激減することとなり、他人と直接触れ合う機会が少なくなった。各地域においては、イベントの自粛により地域のお祭りなどの伝統行事も開催されていない状況にある。

さらには熊本県南部に位置する人吉市は、令和 2 年 7 月豪雨災害による河川の氾濫で甚大な人的・物的被害を被っている。特に被害が甚大であった市内中心部では、被災及びコロナ禍による活動自粛により町内で行われる地域行事が中止となり、二年以上にわたり地域住民が集う機会がない状況が続いている。このままの状態が続けば被災による人口流出も相まって地域コミュニティが崩壊することも危惧されている。

1.2　研究の目的

本研究は、熊本県立大学令和 4 年度地域おこしスタートアップ事業で採択された、人吉市から提案があった「地域コミュニティの活性化持続化と地域行事」というテーマについて研究を行うものである。人吉市中心市街地におけるフィールドワークを実施することにより、当該地域の地域コミュニティの現状と課題を把握し、地域活性化の方策について検討を行う。

1.3　論文の構成

本論文は、全９章で構成されており、各章の構成と内容は以下のとおりである。

まず第１章では、研究の背景及び目的を述べ、第２章では地域コミュニティについて、第３章では令和２年７月豪雨災害後の人吉市の現状について、第４章では人吉市中心部における地域コミュニティの現状について述べる。第５章、第６章、第７章で人吉市中心市街地の町内会の取組事例について紹介し、第８章で地域コミュニティの課題と活性化の方策について考察し、第９章で本研究の結論および今後の展望を述べる。

第 2 章　地域コミュニティについて

2.1　地域コミュニティとは

近年人口減少や少子高齢化を背景に地域コミュニティの衰退が危惧されている。そもそも「地域コミュニティ」とは何を指すか。総務省の「地域コミュニティに関する研究会報告書（令和 4 年 4 月）」によると、以下のとおり記載されている。

> 「コミュニティ」を「（生活地域、特定の目標、特定の趣味など）何らかの共通の属性及び仲間意識を持ち、相互にコミュニケーションを行っているような集団（人々や団体）とし、この中で、「共通の生活地域（通学地域、勤務地域を含む）の集団によるコミュニティ」を特に「地域コミュニティ」としている。

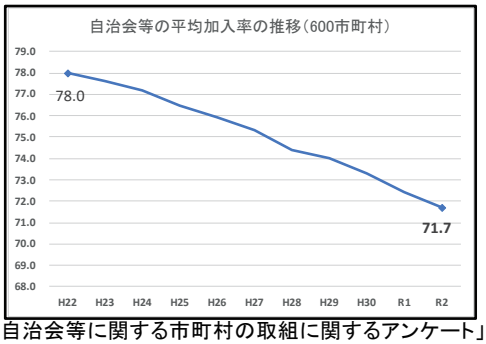
また、長崎県のホームページによると、『地域のみんなが笑顔で暮らせる元気なまちをつくりたい。地域コミュニティは、そんな思いを持って、地域をより良くするために活動する住民同士のつながりや集まりのことをいいます。地域コミュニティでは、自治会（町内会）をはじめ、老人会や婦人会、子ども会、地域づくり団体など様々な団体が活動を行っています。特に自治会（町内会）は、地域コミュニティの中心的な存在として、関係団体と協力しながら、地域の防災や防犯、環境美化や地域の見守りなど様々な活動を支えています。』[1]とされている。

人吉市地域コミュニティ課が作成した「町内会活動の手引き（令和 4 年 5 月 26 日版）」では、町内会とは「一定の地域を単位として、その地域に住む人たちが自主的に結成した組織」とされている。町内会でも法人格を取得すると土地や家屋など財産を保有することもできる。本研究では、人吉市における地域コミュニティとして「町内会」に着目し、研究を行うこととする。

2.2　地域コミュニティの現状

総務省が全国 1,741 市町村を対象にアンケート調査を行い、令和 4 年 2 月に取りまとめた「自治会等に関する市町村の取組に関するアンケート」結果によると、全国における自治会数は 290,054 団体、熊本県では 4,899 団体であった。また同調査において、世帯単位で自治会加入率を把握している 600 団体の加入率(図 1)を見ると、平成 22 年は 78.0%であったが令和 2 年では 71.7%であり、自治会加入率は年々減少傾向にあり、地域に対する住民の関心が薄れつつあると考えられる。

（図1）



「自治会等に関する市町村の取組に関するアンケート」をもとに高濵作成

[1] 出典：長崎県ホームページ「地域コミュニティとは」 https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kurashi-kankyo/sumai/community/imi/

2.3　人吉市の地域コミュニティ

人吉市は、熊本県南部の人吉盆地に位置する人吉球磨地域の中心都市で、日本三大急流の一つ球磨川が東西に市内を貫流している(図 2)。主な産業としては、水稲等の農業や米由来の焼酎である球磨焼酎、豊かな自然や歴史文化を活用した観光産業である。この地域は中世には相良氏により 700 年の長きにわたり治められたことから多くの歴史的建造物や文化財を有しており、司馬遼太郎はその著書「街道をゆく」[2]において「日本でもっとも豊かな隠れ里」と評している。

人吉市の人口は、昭和 30（1955）年 47,877 人をピークに昭和 35（1960）年以降人口減少が始まった（図 3)。令和 2（2020）年には 13,288 世帯、人口 31,108 人（令和 2 年国勢調査確定値）となり、今後も減少傾向が続き、2040 年には 23,608 人まで減少すると予測されている[3]。

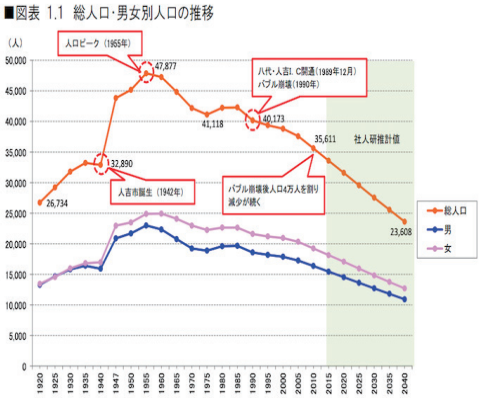
人吉市作成の「町内会活動の手引き（令和 4 年 5 月 26 日版)」によると、人吉市には 6 つの小学校校区に 90 の町内会がある（図 4)。そのうち 61 町内が法人格を取得した認可地縁団体（財産登記が可能）として登録されている。

人吉市における町内会の役割としては、「地域の住みよい環境づくりの支援」「パイプ役としての役割」「地域における新しい力の養成、参加の場づくり」の３つが求められる。第１の「地域の住みよい環境づくりの支援」については、福祉、教育、健康、ゴミ問題について地域に根ざした活動が期待されている。第２の「パイプ役としての役割」については、住民の意見を集約したり、行政情報を住民に知らせたり、住民と自治体の間のパイプ役への期待である。第３の「地域における新しい力の養成、参加の場づくり」は、若い世代や転入者など新しい住民が参加しやすい場を作ることを期待されている。

（図2）

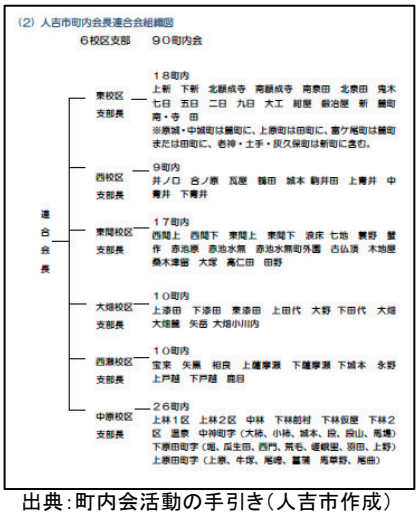
出典：人吉市ホームページ

（図3）



出典：人吉市人口ビジョン

（図 4）



出典：町内会活動の手引き（人吉市作成）

2　出典：「街道をゆく 3 肥薩のみち」司馬遼太郎著・朝日文芸文庫

3　出典：人吉市人口ビジョン（平成 27 年 10 月人吉市）

第３章　令和２年７月豪雨災害後の人吉市の現状について

3.1　豪雨災害による被害状況

令和 2 年 7 月 3 日から 4 日にかけて降り続いた豪雨は、九州地方、特に熊本県の県南地域を中心に甚大な被害をもたらした。人吉市中心部では球磨川や支流の氾濫により 2 階の床上まで浸水した地域もあり、短期間のうちに広範囲にわたって浸水被害が広がった（図 5）。

内閣府の資料によると、7 月 3 日から 4 日の 24 時間雨量は、球磨郡湯前町湯前横谷で 489.5 ミリ、球磨郡あさぎり町上で 463.5 ミリ、球磨郡球磨村一勝地で 455.5 ミリ、球磨郡山江村山江で 453.3 ミリであり、球磨川流域で記録的な大雨となった[4]。災害により県内で 65 名の尊い命が失われ、うち人吉市は 20 名、球磨村は 25 名であった。また、全壊・半壊・床上浸水等の住宅被害を見ると、人吉球磨地域全体で 4,209 棟が被害を受け、うち 1,263 棟が「全壊」であった[5]。

被災した地域では、国や熊本県の支援を受けて、復旧・復興の取り組みが現在も続いている。熊本県においては被災地の復興を推進するために令和 2 年 8 月に「球磨川流域復興局」を新たに設置し、同年 11 月には「令和２年豪雨災害からの復旧・復興プラン」を策定した（図 6）。同プランでは、生命・財産を守り安全安心を確保すること、球磨川流域の豊かな恵みを享受することを基本理念とし、流域全体の総合力による「緑の流域治水」やすまい・コミュニティの創造などの対策を推進することとした[6]。被災地においては、行政の強力な支援のもとで被災した観光施設、旅館・ホテル、仮設商店街の再開など徐々に復興が進んでいる。

（図 5）

県南豪雨 球磨川氾濫

2人死亡 16人心肺停止

9人不明 人吉市街など冠水

県内初 大雨特別警報

出典：2020 年 7 月 5 日熊本日日新聞（抜粋）

（図 6）

熊本豪雨

県、11月に復興プラン

被災者の暮らし再建

被災地の復旧・復興プラン策定について説明する蒲島郁夫知事＝21日、県庁

出典：2020 年 8 月 22 日熊本日日新聞（抜粋）

---

[4] 出典：令和2年豪雨による被害状況等について（令和3年1月7日14時00分現在　内閣府）1頁～2頁

[5] 出典：令和2年豪雨による被害状況等について（令和3年1月7日14時00分現在　内閣府）8 頁～9 頁

[6] 参考：熊本県「令和2年豪雨災害からの復旧・復興プラン」 https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/206/70794.html

3.2　被災地におけるコロナ禍の影響について

被災地において、復旧・復興の足枷となったのが、全世界で猛威を振るっている新型コロナウイルスである。過去の災害においては、平成28 年熊本地震の際には全国から災害ボランティアが熊本を訪れ、被災地の復興を大いに後押しした。平成 29 年の九州北部豪雨で被災した福岡県朝倉市や平成 29 年 7 月豪雨で被災した岡山県倉敷市にも多くのボランティアが駆けつけ支援を行った。しかしながら令和 2 年 7 月豪雨災害においてはコロナ禍で県をまたぐ人の移動が制限されたことから、被災直後に家屋の泥かきや片付けなどを支援する災害ボランティアが不足する状況となり、復旧活動に影響が生じることとなった（図 7）。このためボランティアの受け入れは県民に限定され、県も県民限定のボランティアバスを運行することによって被災地におけるマンパワー不足の解消を図った。

さらには長引くコロナ禍により各地のイベントも中止を余儀なくされた。国において令和 2 年 4 月から 3 回にわたり緊急事態宣言が出され、また令和 3 年 2 月には「まん延防止等重点措置」が新設され、全国的に人の移動や飲食店の営業活動等が制限されることとなった。熊本県においても感染拡大を防止し、医療崩壊を防ぐために令和 3 年 1 月 14 日から同年 2 月 17 日まで県独自の緊急事態宣言が出され、全飲食店の時短要請や不要不急の外出自粛等の措置がなされた。

このような状況下で、感染拡大防止の観点から、大小を問わずイベントが中止されることとなり、毎年多くの人で賑わう人吉の秋の恒例行事である「おくんち祭」も令和 2 年、3 年については神事のみ執り行われ神幸行列は中止されることとなった（図 8）。地域の夏祭りなど地域行事でも自粛が相次ぎ、住民が交流する機会がなくなり地域から活力が失われていった。

（図 7）

ボランティア 県民に限定

県内の豪雨災害の被災地で、ボランティア受け入れが本格化したが、新型コロナウイルス感染防止のため、県内在住者に限定する異例の対応を迫られている。人手不足による復旧の長期化も懸念され、全国のボランティアセンターを統括する全国社会福祉協議会（全社協）は「ボランティアによる共助が難しい中だけに、行政の公助の強化が必要だ」と指摘する。

全社協「公助でカバーを」

人手不足 復旧長期化も

S編 それ、調べます

「ボランティアはまだ来ず、家の中は灯油の臭いが充満したまま。女性の一人暮らしで、家の片付けや災害ごみの運搬などどうすればいいのか、途方に暮れている」。SNSこちら編集局には、被災者の悲痛な声が連日寄せられている。

15日までに県内12市町村がボランティアセンターでの受け入れを開始。対象を2市町村内、5町村が町村内に限定し、泥土除去や、ごみ搬出、屋内外の片付けなどの協力を呼び掛けている。

熊本市社協によると、2016年4月の熊本地震で参加したボランティアは延べ約3万8千人。このうち、県外在住者が77%を占めぬ、支援の大きな力となった。

このほか、17年7月の九州北部豪雨で被災した福岡県朝倉市社協では延べ約4万6千人、18年7月の豪雨に見舞われた岡山県倉敷市社協では延べ約7万6千人のボランティアが、それぞれ参加。県外からの多くの支援に助けられたという。

一方、新型コロナが影を落とす今回の熊本豪雨では、全社協はホームページで、全国のボランティアに「被災地の情報をよく確認の上、現地入りに注意を」と性急な参加を控えるよう呼び掛けている。

センター長を務める高橋良太さんは「全国に大勢のボランティア希望者がいるが、被災地に入れずにいる。水害は続が国まらないうちに作業するのが原則。人手不足が続けば復旧は長期化しかねない」と懸念。被災地が安心して県外ボランティアを受け入れられるような感染防止策などを関係機関と調整中だ。

その上で、特例措置で民家敷地内でも行政が重機で迅速に片付けができるようにして、ボランティアは屋内の片付けに絞るなど、共助を公助でカバーする新たな支援の在り方も提言している。（岩下勉、野田敬）

県内被災地の災害ボランティアセンター

市町村	対象	問い合わせ先
八代市	県内	0965(62)8228
人吉市	県内	090(5731)9259
球磨村	県内	0966(83)8335
芦北町	県内	080(3085)4554
津奈木町	県内	0966(35)0093
荒尾市	県内	0967(46)3952
相良村	県内	0966(38)2074
小国町	県内	080(9245)4064
錦町	県内	0966(42)1112
あさぎり町	県内	0966(24)1508
多良木町	県内	
山江村	県内	

※人吉市と球磨村、芦北町と津奈木町の問い合わせ先は同じ

出典：2020 年 7 月 15 日熊本日日新聞（抜粋）

（図 8）

「おくんち祭」今年も

人吉市・青井阿蘇神社　神幸行列は中止

7月の豪雨災害で甚大な被害が出た人吉・球磨地方の最大の秋祭り。「青井阿蘇神社のおくんち祭」が3日、始まった。「呼び物の神幸行列はなく、ほぼ神事のみの開催だが、市民からは「無事に始まってよかった」との声が上がった。

国宝の青井阿蘇神社は、おくんち祭の初日は、火災の防止を願う鎮火祭で開幕した。本殿での神事の後、氏子総代や奉賛会の役員ら約20人が拝殿に参列。石口の宵には御神火が点火され、福嶋義文宮司が球磨川の水と交流でとれた川魚、川砂を順にかけて消し止め、開催は難しい」と河野武の今期雅美さん（82）は豪雨で甚大な被害が出た。見守った錦町一参道に濁流が流れ込み、はす池が土砂に埋まるなど被害が出た。神社は被災直後から、全国からの支援を受け復旧に取り組み、8月には夏越祭を行う。2千人が練り歩く神幸は中止に。甚大な雨災害の復興と新型コロナウイルスの終息を願う祈願祭がある。（小山智史）

熊本豪雨の主な被害状況

死亡 65人	行方不明 2人	
住宅被害	全壊	1470棟
	半壊	3023棟
	床上浸水	1519棟
	床下浸水	1144棟
	一部損壊	1719棟
避難所		701人
仮設住宅	建設型	292戸（759人）
	借り上げ型（みなし）	229戸（603人）
	公営住宅など	254戸（533人）

3日現在、県集計分

出典：2020 年 10 月 4 日熊本日日新聞（抜粋）

第 4 章　人吉市中心部の地域コミュニティの現状について

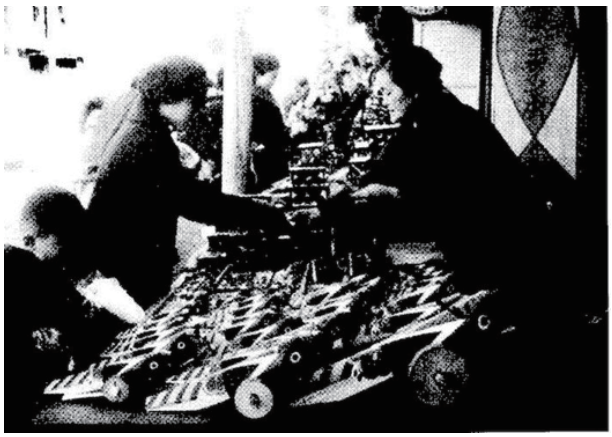
4.1　調査対象地域について

今回の研究対象地域として選定したのは、球磨川とその支流である山田川で囲まれた、人吉市の中心市街地にある 7 町と呼ばれるエリアである(図 9)。具体的には、七日町、五日町、二日町、九日町、大工町、紺屋町、鍛冶屋町の 7 つの行政区であり、多くの商店や飲食店、旅館等が集まっている。名前に〇日町と数字がついている町名があるが、これは昭和の時代に毎月決まった日に「市」が立っていたことの名残りである（図 10)。

（図 9）

枠内が7町　出典：熊本県万能地図（震災復興特別版）より抜粋　発行：熊本日日新聞社

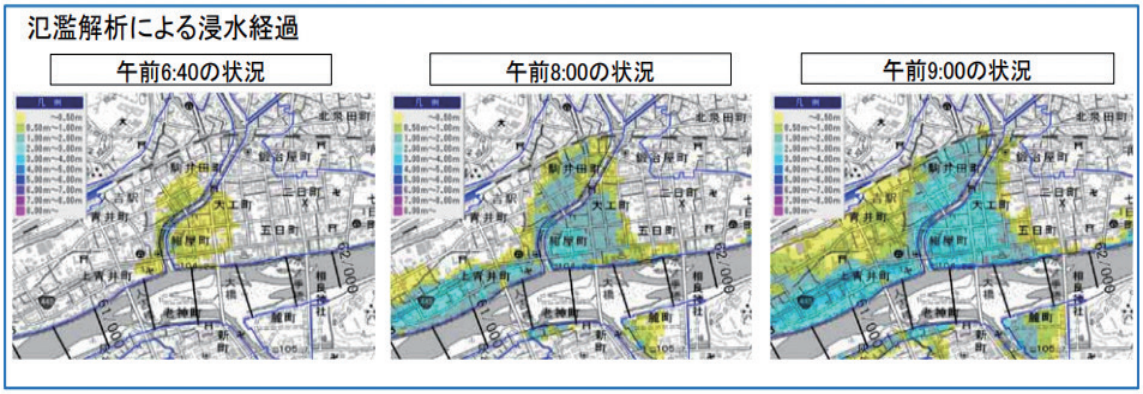
（図 10）



春の市風景（人吉市五日町・昭和 37 年）　出典：「目で見る　球磨・人吉の 100 年」郷土出版社

令和２年７月豪雨災害では、中心市街地にある７町は甚大な被害を受けた。紺屋町や大工町など２メートル以上浸水した地域もあった（図 11）。７町の世帯数と人口について令和２年豪雨の被災前後の人口を比較すると、市全体では 2.1%の減となっており、被災前の人口減少率がおよそ１%台で推移していたことからすると、豪雨災害の影響があったものと推測される。また表１のとおり、７町では増加した大工町を除き減少率は 4.8%～10.7%であり、市平均よりも減少率がかなり高くなっている。これは当該区域の浸水被害が甚大であり、被害により全壊となった家屋も多く街中では解体が進んだため町外へ転出した者が増加したことによるものと考えられる。

（図 11）



出典：第2回令和2年球磨川豪雨検証委員会説明資料より抜粋
（令和2年 10 月 6 日国土交通省九州地方整備局、熊本県）

（表1）被災前後の町内別人口・世帯数　　（単位：世帯・人）

町名	被災前（R1）		被災後(R2)		人口増減・率（R2−R1）
	世帯数	人口	世帯数	人口	
総数	15,388	32,122	15,156	31,445	▲677（▲2.1%）
七日町	76	150	73	142	▲8（▲5.3%）
五日町	60	123	60	116	▲7（▲5.7%）
二日町	38	76	33	71	▲5（▲6.6%）
九日町	75	182	74	169	▲13（▲7.1%）
大工町	38	60	39	61	1（ 1.7%）
紺屋町	138	271	128	242	▲29(▲10.7%)
鍛冶屋町	79	146	74	139	▲7（▲4.8%）

※人吉市市民課「町内別人口・世帯数（住民登録）」資料をもとに高濵作成
出典：令和元年版人吉市統計年鑑（第 33 回） ２−８町内別人口・世帯数（住民登録）
令和３年版人吉市統計年鑑（第 35 回） ２−８町内別人口・世帯数（住民登録）
※被災前：令和元年９月 30 日現在の外国人登録を除く電算集計結果
※被災後：令和２年９月 30 日現在の外国人登録を除く電算集計結果

4.2　被災後の町内会の活動について

地域コミュニティの活動の一つに「夏祭り」がある。人吉では 10 月に青井阿蘇神社でおくんち祭という大きな祭りがあるが、各地域においても地域の神社で神事が執り行われるとともに、夏の時期には地域で祭りが行われており、地域の町内会や子供会が中心となり子ども神輿や福引などのイベントが開催される(図 12)。しかしながら、令和 2 年 7 月豪雨災害及び新型コロナウイルスの感染拡大をきっかけに、地域行事は規模縮小あるいは中止されることとなり現在に至っている。

ついては、被災後の地域コミュニティの現状と課題を把握するため、7 町の町内会長に対するヒアリング調査を実施した。

(図 12)

7月		
期日	祭り名	会場
1日(月)	唐渡神社夏祭り	唐渡神社（下戸越町）
3日(水)	多子塔公夏祭り	鍛冶屋町多子塔公碑前
6日(土)	前村薬師堂夏祭り	前村公民館内
7日(日)	薬師堂夏祭り	井ノ口八幡宮内
	矢黒神社　夏祈祷祭	矢黒神社
10日(水)	上永野薬師堂夏祭	上永野町薬師堂境内
14日(日)	ちょっと酔ってみろ会夏祭り	中林町公民館駐車場
15日(月)	北向き地蔵祭り	瓦屋町鳥越地蔵堂広場
17日(水)	法身塔夏祭り	瓦屋町戸亀法身塔敷地内
19日(金)	聖泉院観音堂夏祭り	瓦屋町永田聖泉院境内
20日(土)	岩清水地蔵尊夏まつり	南眼成寺町岩清水、町内会館
	ずおんさん・サマーフェスタ	八坂神社・七日町会館駐車場
	聖徳太子夏祭り	大工町会館
	大村横穴群古墳祭り	大村古墳城本公園
	水難除け地蔵尊夏まつり	下青井町内会館
	西岡下町夏祭り	西岡下町公民館
	古仏頂町観音堂夏祭り	古仏頂町観音堂境内
	上林町一区夏まつり	上林町一区公民館
	八坂神社祭礼・紙園さん夏祭り	下林町八坂神社境内
	子安観音夏祭り	子安観音堂周辺・公会堂（中神町馬場）
21日(日)	水天宮まつり	下新町会館
	二日町えびす祭	二日町会館
	鶴田町あみだ如来夏祭り	鶴田町会館一帯
	馬頭観音夏祭り	下林町二区公民館
24日(水)	出町地蔵尊夏まつり	出町地蔵尊（上青井町）
25日(木)	菅原天満宮夏祭り	南泉田町菅原天満宮
27日(土)	願成寺不動尊夏まつり	願成寺境内
	紺屋町伊勢神宮および地蔵尊夏祭り	神宮・地蔵尊・紺屋町会館一帯
	火除不動尊大祭	中青井町内会館前駐車場
	令和元年おこば校区夏祭り	大畑コミセン体育館
	宝来町薬師夏まつり	宝来町薬師堂境内
27日(土)	不動尊夏祭り	中神町城本不動尊内「不動板通り」
	段町内会夏祭り	段地域学習センター
	堀町内夏祭り	堀町内公民館
28日(日)	文殊堂夏祭	文殊堂境内（下永野町）
	観音堂夏祭り	観音堂境内・市老人福祉センター前駐車場
	瓜生田町内会夏祭り	瓜生田 地域学習センター
	嵯峨里観音夏祭り	嵯峨里公民館広場

8月		
期日	祭り名	会場
2日(金)	ふれあい村夏祭り	養護老人ホーム延寿荘グラウンド（蟹作町）
3日(土)	ゆうれい祭り	永国寺（土手町）
	聖光院釈迦如来様夏祭り	下薗摩瀬町地域学習センター多目的広場
	納涼上戸越夏祭り	上戸越町公民館
4日(日)	金刀比羅宮夏祭	若宮神社（五日町）
	水天宮祭り	寺町水天宮境内
	菅原神社夏まつり	西門地域学習センター
	水天宮夏祭	鮫井田町水天宮境内
10日(土)	東岡下町こども会夏祭り	ホテル摩の往駐車場
11日(日)	みののフェス	裏野町遊園地
12日(月)	えびすまつり	九日町
15日(水)	第 65 回人吉花火大会	中川原公園・ふるさと歴史の広場
17日(土)	西岡上町夏祭り	西岡上町公園
24日(土)	赤池原町夕涼会	和泉自動車駐車場
	鬼木町夏越し祭り	鬼木町内会館一帯
25日(日)	夏祭り（下城本町内・あいせい・羽月神社）	あいせい駐車場
31日(土)	東岡上町夏祭り	岩屋熊野座神社

※7月1日～8月31日に開催予定の祭りです。
※開催日・場所などの変更や、中止になることがあります。
詳細は各町内会などにお尋ねください。

問合せ　市観光振興課観光振興係
（☎22－2111　内線5142）

出典:「広報ひとよし」平成 30 年 7 月号

4.3　町内会長に対するヒアリング調査

令和 4 年 6 月 20 日、肥後銀行人吉支店 1 階の賑わい創出スペースにおいて、7 町の町内会長を対象にヒアリング調査を実施した。人吉市役所を通じて町内会に呼びかけを行い協力してくださったのは、七日町谷水会長、五日町深水会長、二日町清田会長、九日町木本会長、大工町郡山会長、紺屋町渕木会長、鍛冶屋町吉田会長の 7 名である。調査項目は、町内会及び地域行事の現状と課題、展望について聞き取りを行った。

7 月 20 日町内会長ヒアリングの様子

調査結果について、各地域では 6 月から 8 月にかけて神社での神事の他に福引や懇親会などの行事が行われていた。しかしながら、令和 2 年、3 年の 2 年間はどの町内においても豪雨災害と新型コロナウイルスの影響で神事以外の地域行事は実施されなかった。しかし令和 4 年度については鍛冶屋町では「従来通り実施」、七日町、五日町、紺屋町では「神事のみ実施予定」との方針であった。他方、実施しない町内の理由としては、水害で住民が減ってマンパワー不足であること、資金難であること、被災して会場や道具が使えなくなったこと等であった（表 2)。

各町内の意見をまとめると、次のような課題が確認できた。

① 運営側のマンパワー不足
② 地域に小学生がいないため神輿が出せない
③ 被災により夏祭りの会場や道具がない

①はどの町内会にも共通する課題であり、若い世代を中心とする人口減少（流出）により町内会活動に関わる住民の減少が原因と考えられる。②については、少子化により町内に小学生が一人もいないところもあり、将来の担い手不足という意味でも深刻な問題である。③については災害の場合個人の住宅等生活環境の復旧復興が優先されるため地域の共通財産の復旧が後回しになり、また被災者からは町内会費を集められない実情もあるため資金面での困難が伴うものと考えられる。

（表 2）7町における夏祭りの現状

町名	地域行事	時期・場所	内容	R4 の予定・理由・内容
七日町	ぎおんさん夏祭り	7 月 24 日 八坂神社	懇親会	神事のみ実施 コロナの影響
五日町	金刀比羅宮夏祭り	7 月 24 日 若宮神社	神事、バザー （企業支援）	神事のみ実施 マンパワー不足
二日町	えびす祭り	7 月下旬 二日町会館	神事	実施なし 会館解体、道具廃棄
九日町	えびす祭り	8 月 えびす神社	神事	実施なし 水害で住民減
大工町	聖徳太子夏祭り	7 月下旬 二日町会館	神事、懇親会	実施なし 会館解体（二日町会館）
紺屋町	夏祭り	7 月 14 日 紺屋町会館	神事、福引	神事のみ実施 住民減、資金難
鍛冶屋町	多子塔公夏祭り	6 月 29 日 多子塔、町内	神事、福引	従来通り実施 子ども神輿、福引

※令和 4 年 6 月 20 日現在の聞き取り状況であり、変更された可能性あり

第５章　鍛冶屋町の取組事例

5.1　鍛冶屋町の概要

鍛冶屋町は中心市街地の北部に位置し、74 世帯 139 人（令和 2 年 9 月 30 日現在）が生活する地域である。商店街は「鍛冶屋町通り」と呼ばれ、石畳が整備されレトロな雰囲気の街である。

町内にある記念碑には、『この多子塔は 1647 年（正保 4 年）に建立されました。（中略）当時、疫病での流行で亡くなった多くの子供たちの冥福を祈るため、建てられた碑であると言われています。多子塔とは庚申塔のことで庚申信仰の一つと考えられています。このように多子塔と銘された庚申塔は人吉球磨の他の地域にも存在していましたが、現存しているのはこの鍛冶屋町だけです。毎年旧暦の 6 月 1 日に行われている祭りは「多子塔公の夏祭り」として親しまれています。2006 年人吉市』と記されており、地域住民に大事にされている。

鍛冶屋町通り（令和4年 6 月 29 日撮影）

多子塔での神事の様子（6 月 29 日撮影）

5.2　多子塔公夏祭り

令和 4 年 6 月 29 日（水曜日）、子ども神輿を含む夏祭りを実施した鍛冶屋町の多子塔公夏祭りを取材した。

祭りは午後 4 時 30 分から青井阿蘇神社神職による神事が執り行われ、午後 5 時から子ども神輿が町内を練り歩き、午後 6 時 30 分から福引大会が開催され、併せて多子塔守護のお札が販売された。神事には住民約 15 人が参加し、子ども神輿には小学生 5 人と保護者 4 人が参加した。祭りが 2 年ぶりに開催されたことから、福引は多くの住民で賑わい準備された景品はすぐに完売した。

鍛冶屋町町内会の吉田会長に話を伺ったところ、「鍛冶屋町が人吉の祭りの一番始まりであり、鍛冶屋町から人吉を元気にしなければならない。今年は青井阿蘇神社のおくんち祭も開催されるので町内会も参加する。」とのことであった。

子ども神輿（6 月 29 日撮影）

福引の様子（6 月 29 日撮影）

第 6 章　七日町の取組事例

6.1　七日町の概要

七日町は中心市街地から東部に位置しており、73 世帯 142 人（令和 2 年 9 月 30 日現在）が生活する比較的小規模な町である。町内の地域行事としては、夏の「ぎおんさん夏祭り」と冬の「えびす祭り」が行われている。「ぎおんさん夏祭り」の会場である八坂神社（「祇園神社」とも言う。）は、小さな 1 級河川曼荼羅川の川床に建てられた珍しい神社であり、普段は戸板が立てられていて、祭りの時だけ開けられる。ちなみにこの曼荼羅川は、建武元年（1334 年）の創建時に「社壇の下からにわかに清水が湧き出した。その水は甘露のごとく美味しく、不思議な清水であった。そこで曼荼羅供養をしたので、この水の流れを「曼荼羅川」というようになった」[7]と伝えられている。

町内会活動については、令和 4 年度は新型コロナウイルスの影響で夏祭りは 7 月 24 日に神事のみ実施すること、神事に先立ち 7 月 10 日に住民により八坂神社の清掃活動を行うことが決定された。ついては、夏祭りの一連の活動に学生が参加させていただくこと、参加した住民に対しアンケートを実施することについて町内会長の了解をいただいた。

八坂神社（令和4年 7 月 9 日撮影）

6.2　人吉高校との共同研究

七日町の地域行事について調査するにあたり、若者の参加が地域にどのような影響を与えるかについて検証するため、大学生だけでなく地元の高校生と一緒に活動することを検討した。七日町の近隣に位置する県立人吉高校では地域課題解決に向けた探究活動に積極的に取り組まれており、高校に大学生との共同研究を打診したところ、3 年生 6 人が手を挙げ自主研究として参加することとなった。

研究手法としては、対面授業と遠隔授業を組み合わせた高校生・大学生合同のゼミ活動と、フィールドワークによる町内会との意見交換や街歩き等を行うことにより、地域の実情を把握し、課題解決策を検討した。

また、人吉高校の生徒については、最終的に人吉市役所に対し地域コミュニティの活性化について政策提案することを目標として取り組みを進めた（表３スケジュール参照）。

合同ゼミは、人吉高校の教室をお借りして授業を行い、大学生が対面及び遠隔（zoom）で授業に参加する形で実施した。高校生は放課後の時間を活用し、大学での授業時間（16 時 10 分～17 時 40 分）

6 月 20 日人吉高校でのゼミ風景

[7] 出典：「人吉のまつり～春夏秋冬・四季の楽しみ～」人吉市教育委員会　８頁

と活動を合わせることで合同での実施を実現した。全 8 回の授業はグループワークや演習を中心とし、特に高校生に対しては課題解決やプレゼンテーションの方法についての学習を丁寧に行った。他方、大学生は高校生のグループ活動に対するアドバイスや質問対応等を担当した。また市役所への報告前には、高校生が大学生に対し模擬プレゼンテーションを行い、意見交換を行った。

フィールドワークは、七日町町内会の地域行事に学生が参加する形で３回実施した。フィールドワークの目的は、学生側は現地での活動を通じて地域への理解を深めることにある。他方、地域にとってはいつも固定化されたメンバーで活動している中に若者が関わることで変化が起こることを期待した。

（表3）合同ゼミスケジュール

	期日	項目	場所	活動メニュー	内容
1	6 月 13 日	合同ゼミ①	人吉高校	オリエンテーション	ガイダンス、アイスブレイク
2	6 月 20 日	合同ゼミ②	人吉高校	解説・グループワーク	KJ 法について
3	7 月 4 日	合同ゼミ③	人吉高校	解説・演習	インタービューについて演習
4	7 月 10 日	フィールドワーク①	八坂神社、 七日町会館、 中心市街地	清掃ボランティア ヒアリング調査 街歩き	神社の清掃活動 町内会住民への聞き取り 地元ガイドによる街の解説
5	7 月 11 日	合同ゼミ④	人吉高校	グループワーク・解説	フィールドワーク振り返り 課題解決の手法について
6	7 月 24 日	フィールドワーク②	八坂神社	夏祭り参加 参加者アンケート	神事への参加 参加者アンケート
7	8 月 1 日	合同ゼミ⑤	人吉高校	グループワーク・解説	フィールドワーク振り返り プレゼンテーションについて
8	8 月 16 日	フィールドワーク③	七日町会館	ヒアリング調査	町内会長への事後調査
9	8 月 23 日	合同ゼミ⑥	人吉高校	グループワーク	プレゼン資料の作り方①
10	9 月 5 日	合同ゼミ⑦	遠隔授業	グループワーク	プレゼン資料の作り方②
11	9 月 13 日	合同ゼミ⑧	人吉高校	演習	模擬プレゼンテーション
12	9 月 26 日	成果報告会	人吉市役所	成果報告	市長への成果報告

6.3　フィールドワークについて

今回のフィールドワークでは、課題解決に向けて地域の実情を現地で確認することと、地域行事に学生が参加することによる地域住民への影響を調査することを活動目的とした。地域行事に大学生と高校生が参加する形で、七日町の夏祭りの前後に３回（7 月 10 日、7 月 24 日、8 月 16 日）実施した。

フィールドワーク１回目の７月 10 日には、町内会が実施する八坂神社の清掃活動に学生 10 人（高校生 6 人、大学生 4 人）が参加した。その後住民に対する町内会の現状や課題に関する聞き取り調査を行い、地元の方に案内していただき中心市街地の街歩きを行い、街中に点在する神社や豪雨災害によって解体され更地になった市街地を実査に確認した。さらに神社に奉納する絵馬作りワークショップ（町内会主催）にも学生が参加した。

7月10日　中心市街地街歩き

２回目の７月 24 日の夏祭り当日は、学生７人（高校生 4 人、大学生 3 人）が参加した。住民と一緒に神事に参加した後、参加した住民にアンケート調査を実施した。また昔ながらの遊びを住民から教えてもらい交流を深めた。

７月 24 日　神事への参加

３回目の８月 16 日は、高校生１人が参加した。谷水町内会長に対し町内の現状と課題、展望等について確認した。

6.4　住民への聞き取り調査（7 月 10 日）

七日町会館（公民館）において、学生 10 人（高校生 6 人、大学生 4 人）が、七日町の住民 8 人に対し聞き取り調査を行った。学生が住民に対し、「七日町のこと」「豪雨災害の被害状況」「地域の課題」について質問する形で進めた。

７月 10 日　七日町町内会聞き取り調査

まず七日町の名前は毎月 7 日に「市」が立っていたことに由来し、市は昭和 40 年代まで続いていたとのことであった。

令和 2 年 7 月豪雨は戦後最大の水害であり、町内で被災しなかった世帯はたった 4 世帯、被災した所はまだ完全に復興できていないこと、転出した世帯との付き合いが続いていることを確認した。また、町内の祭りの始まりは定かではないが被災前までは欠かさず続けていたこと、八坂神社で神事を行った後には地域の親睦を兼ねてバーベキュー会を行っていたこと、昨年度はコロナの影響で神事のみ行ったこと、冬の「えびす祭り」もコロナの影響で中止し 308 回で止まっていること、豪雨災害で大きな被害を受けたが、それよりも地域行事にとってコロナの影響の方が大きいことを確認した。

「住民が感じる地域課題は何か」との質問に対し、「人手が足りない」「担い手となる子供がいない」「集まれる場所がない」「婦人会などの組織がなくなり、地域での集まりや楽しみが減った」「空き家や更地が多い」との意見を聞くことができた。

6.5　地域住民へのアンケート調査（7 月 24 日）

神事終了後に、参加した住民 7 人に対し、アンケート調査を実施した（表 4 参照）。

夏祭りへの参加状況については、「毎年」と回答した人が最も多かった（5 人）。

夏祭りの参加理由は、「町内行事だから」、「伝統行事だから」「楽しみだから」「地域のことが好きだから」と回答した人が 5 人、「役員だから」「町内の交流がある」と回答した人が 4 人、その他として「安心を覚える」と回答した人が 1 人であった。

神事後のイベントの実施については、全員が「実施した方がいい」と回答、その理由として「町内の親睦ができる（1 人）」「町内の和が保てる（1 人）」との回答があり、具体に「町内住民交流会」や「バーベキュー会」が挙げられた。なお、七日町では被災前までは神事後に町内の親睦を深めるためバーベキュー大会が行われていた。

地域にとっての課題について、「住民が少ない」「高齢者が多い」「若い人が少ない」と回答した人が 5 人と最も多かった。

最後の自由記述については、「早く行事を行いたい」「学生の姿がありやりがいがあった」「小さな町内であっても行事をしっかりと実施していきたい」との意見を聞くことができた。

（表 4 七日町地域住民アンケート　回答者 7 人）

	質問項目	質問内容/回答
質問1	年齢・性別	60 代　6 人、80 代　1 人 男性　5 人、女性 2 人
質問2	住所	全員町内在住
質問3	夏祭りへの参加	・初めて:0 人 ・2回目:1 人 ・数回　:1 人 ・毎年　:5 人
質問4	夏祭りに参加した理由 （複数回答可）	・町内の行事だから　:5 人 ・伝統行事だから　:5 人 ・楽しみだから　:5 人 ・地域のことが好きだから　:5 人 ・役員だから　:4 人 ・町内の交流がある　:4 人 ・その他　:1 人（安心を覚える）
質問5	神事以外のイベント（バーベキュー等）についての考え	実施した方がいい　:7 人 実施しなくていい　:0 人
質問6	「質問5」の理由	・町内の親睦ができる　:1 人 ・町内の和が保てる　:1 人
	地域で実施したい行事	・町内住民交流会　:1 人 ・バーベキュー会　:1 人

質問7	地域にとっての課題は何か （複数回答可）	・住人（世帯）が少ない　:5 人 ・高齢者が多い　:5 人 ・若い人が少ない　:5 人 ・コロナ疲れ　:3 人 ・災害への対応　:2 人 ・財政難　:0 人 ・皆の意欲が低下　:0 人
質問8	想いや不満など意見 （自由記述）	・早く行事を行いたい ・（祭りに）学生さんたちの姿があり、やりがいがあった ・小さな町内であっても行事をしっかりと実施していきたい ・高齢者パワーで町内元気に過ごしていきたい ・どの町も人口減またコロナ禍で集まりができないので つながりが薄くなる可能性が心配

6.6　七日町町内会長への聞き取り調査（8 月 16 日）

七日町会館において学生１人（高校生１人）と谷水町内会長に対し、町内会の現状と課題について聞き取り調査を行った。以下はインタビュー内容をまとめたものである。

8 月 16 日　お礼の色紙を渡す高校生と谷水会長

谷水会長は、元々は人吉市の出身ではないが、35 年にわたり七日町に在住し、現在町内会長を務めている。歴代の町内会長からの口伝により、地域行事や八坂神社の管理を引き継いでいる。

八坂神社は隣の「南泉田町」にあるがずっと以前から八坂神社の管理と祭りは七日町が行っていてその経緯は不明である。普段神社は施錠していて、祭りの時と清掃の時だけ神社を開ける。川床の上に建っている神社は珍しく、神社の開け方には工夫が必要だが、代々の町内会長に伝えられている。

七日町はアパートを含め 70 世帯ほどだが、小さい町内に関わらず他の町内と比べると元気な地域である。芸達者が多く、コロナ以前の敬老の日前後には町内で演芸会を開催していた。また、トラック後部のコンテナを改装した野外ステージでコンサートを行っていた時期もあった。懇親会などのコミュニケーションを図る場も多かった。七日町の住民同志の仲が良い秘訣は、「ムードメーカーの存在」である。ある人は地域の子供からも愛称で呼ばれるような存在で、名物お爺さんがいる。また町内のイベントの実行部隊である「七色（にじ）の会」という 11 人からなる組織がある。被災して町外に転出した者が引き続き「会長」を務めているし、住民でないが元七日町郵便局局長や学校の先生も入会している。町が小さいからこそ仲が良いという面がある。

現在子供がいる世帯は１～２軒であり、人口減少の影響で子供会、老人会、婦人会は休会中

である。活動中の団体は消防団と「七色の会」、「若妻会」くらいである。以前は子供会やゲートボールの集まりもあり町内会から活動を補助していた。神事の後の懇親会にはいろいろな団体や郵便局からも参加があった。夏祭りに出店がなく神事だけになったので家族連れで人が集まらなくなった。

現状に対して、高校から大学進学で人吉から出て行って就職で帰ってくる状況ではない。将来人吉球磨の教員や公務員になりたい若者を増やすと地元に貢献できるのではないか。錦町には工場など雇用があって人口が増えていた。最近では山江村が教育に力を入れていて人吉にも近くベッドタウン化して人口が増えつつある。行政が特徴を出して若い人が安心して住めるようなまちづくりが必要だろう、との意見をいただいた。

6.7　人吉高校生徒による活動報告会（9 月 26 日）

人吉市役所において、松岡人吉市長、丸本市民部長、谷水七日町町内会長等に対し、高校生 6 人が活動報告を行った。大学生 2 人も発表補助として参加した（詳細は巻末資料参照）。

報告内容は、人吉市の現状と課題、地域行事の問題点、地域コミュニティ活性化のアイデアである。まず人吉市の現状について RESAS[8]を使って分析し人口減少、特に生産年齢人口の減り幅が大きく今後ますます人口減少が加速することを報告した。また七日町のヒアリングを通して地域住民は「住民が少ない、高齢者が多い、若者が少ないこと」を課題と感じており、地域行事の問題点は、「少子化で地域行事の運営を手伝える若者が少ないこと」、「人口減少により地域行事の担い手がいないこと」、「コロナ禍で地域行事が行えないこと」、「どんな地域行事が行われているか知らない人が多いこと」であると分析した。そこで、若い人たちが行事に参加しやすい環境を作ることや他の地域との連携等が必要であり、現在では開催されなくなった「まちの市を復活させること」を提案した。

講評として、松岡市長から「人材不足が一番の問題であり高校生にも課題解決に主体的に関わってほしい」との意見をいただいた。また、丸本部長から「まちの市という着眼点が良い」との意見、谷水町内会長からは「若い人が行事に関わってくれて地域が元気になった」との意見をいただいた。

人吉高校生徒による報告（令和 4 年 9 月 26 日撮影）

提案 「まちの市を復活させる！」

松岡人吉市長による講評

[8] 産業構造や人口動態、人の流れなど官民のビッグデータを集約し、可視化するシステム　https://resas.go.jp/#/13/13101

6.8　共同研究に参加した高校生の感想

今回の共同研究を終えて、参加した高校生の感想は表 5 の通りである。活動を通じて自分が住んでいる地域の課題に対する気づき、地域の方々の想い、また地域コミュニティの存続には担い手となる若い人の力が必要であることなどを感じ取ることができたものと考える。

（表 5 高校生の感想より）

生徒 A	地域の課題を考えるのと同時に、住民の方々の地域愛を肌で感じることができた。その地域愛を大切に、まちのさらなる発展に貢献していきたいと思う。
生徒 B	今あるものを継承し人吉球磨らしさを守りながら、若い世代を中心に地域をつくっていく必要があると感じた。提案を実際に実行したい。
生徒 C	地域の方はお互い支え合いながら楽しく過ごしているとわかった。そんな温かい町をこの提案でこれからも存続させていきたいと思った。
生徒 D	この活動を通して、人吉市の課題に初めて気付くことが出来た。また、地域の方々の人柄の良さも感じられて、全ての活動を楽しく行うことができた。
生徒 E	若手や担い手不足を改めて痛感した。伝統文化を存続させるためにも、新しいアイデアと共にまちを活性化させていきたい。
生徒 F	地域の課題を間近で感じることが出来た。人々の交流が出来る地域行事だからこそこれからも残していきたいと思った。

清掃活動終了後八坂神社にて　七日町町内会の皆さん、人吉高校生、熊本県立大学生と一緒に
（令和 4 年 7 月 10 日撮影）

第 7 章　おくんち祭における紺屋町・鍛冶屋町・九日町の取組事例

7.1　おくんち祭について

おくんち祭は、青井阿蘇神社（人吉市上青井町）で行われる例大祭である。青井阿蘇神社のホームページ[9]によると、「古来より誠にめでたいとされてきた陽の最高の数が重なる重陽の日に神様が御鎮座された縁日をお祝いする、ゆうなれば神社の誕生日のお祭で、明治の暦の改正で現在は 10 月 9 日の神幸式を中心に 3 日から 11 日までの日程で行われています。」とされ、平安時代から 1200 回以上続く由緒ある祭りである。祭りのハイライトは 10 月 9 日に行われる神幸行列で、神輿や獅子が市街地を練り歩き多くの見物客で賑わう。地元住民は、町内会や高校単位で「大人神輿」や「子ども神輿」として参加し、神幸行列の日が平日の場合は人吉市内の学校が「休校」となる。なお、この「休校」措置は 2011 年（平成 24 年）に実現したもので、「人吉市は国土交通省観光庁の「家族の時間づくりプロジェクト」の認定を受け、10 月 9 日を市内小・中学校の休業日とし、厚生労働省の「地域の特性を活かした休暇取得促進のための環境整備事業」と組み合わせて市内及び周辺の事業所に年次有給休暇の取得を進めるよう推進した。それにより 10 月 9 日の神幸行列にはより多くの人が参加できるようになっている。『人吉新聞』（2012 年 10 月 9 日号）によれば、2012 年には約 1,000 人が行列に参加して市街地を練り歩いた。」（黒﨑 2019[10]）という事情がある。

国宝青井阿蘇神社（令和 4 年 8 月 12 日撮影）

この人吉市民の一大イベントであるおくんち祭の神幸行列は、令和 2 年 7 月豪雨災害及び新型コロナウイルスの影響により令和 2 年及び 3 年は中止を余儀無くされた。令和 2 年には 7 月豪雨の被災地復興と新型コロナウイルス終息を願う祈願祭が行われた。令和 3 年にはライトアップした楼門前で灯籠を使った「起」の火文字を灯し、人吉球磨地域の復興を祈った。

令和 4 年には 7 月豪雨で被災した禊橋の修復が完了し 10 月 2 日に渡り初めが行われ、3 日から祭りが開幕した。9 日には神事が行われた後、地域団体の参加により、3 年ぶりに神幸行列が執り行われた。神幸行列は、一部コースや規模が縮小されたものの、大人神輿が 7 団体約 350 人、子ども神輿が 13 団体で約 405 人、総勢約 750 人が神幸行列に参加した[11]。3 年ぶりの神幸行列ということもあり、コロナ禍にあって沿道は多くの人で賑わった。

令和 4 年おくんち祭神事の様子(10 月 9 日撮影)

9　参考:青井阿蘇神社ホームページ　https://aoisan.jp/about/matsuri/

10　出典：「神道文化の現代的役割　地域再生・メディア・災害復興」（黒崎浩行著・2019）64 頁より引用。

11　令和 4 年神幸行列参加者数は、青井阿蘇神社奉賛会に確認。

7.2　紺屋町・鍛冶屋町・九日町町内会の取組事例

令和 4 年の神幸行列には、地域から 20 団体が神幸行列に参加した。その中には、令和 2 年 7 月豪雨で甚大な被害を被った紺屋町・鍛冶屋町・九日町町内会が合同で参加している姿があった。そこで、紺屋町町内会の渕木会長と育成会(注：育成会は子供会の呼称)である片山会長に対し令和 4 年 11 月 7 日にインタビューを行い、参加状況について聞き取りを実施した。

令和 4 年の神幸行列の様子(10 月 9 日撮影)

7.3　紺屋町での聞き取り調査（概要）

紺屋町・鍛冶屋町・九日町町内会は、神幸行列には毎回合同で参加している。合同となった理由は、平成に入り地域の子供の数が少なくなり町内会単体での参加が難しくなったため近隣の三町内合同での参加となったとのことである。

今回の参加については、町内会長が青井阿蘇神社の総代を務めていることもあり、神幸行列の開催が決定された時点で町内会の参加も決定した。また豪雨災害の影響として、公民館が被災し保管してあった法被や道具に被害も出た町内もあったが、今回は鍛冶屋町の神輿で参加し、流された法被は新調したという。参加する子供の調整はそれぞれの「育成会」が行い、子供 15 人と引率の保護者が参加した。子ども神輿参加後の参加者の満足度は非常に高かったという。

「豪雨災害やコロナ禍の中で何故祭りに参加できたのか」との質問に対し、「おくんち祭が開催される以上は参加するのが普通であり、地域の祭りを絶やすことはできないとの思いがある」、また、「祭りに参加することが楽しみ」であるとの回答であった。三町内合同での参加となればかえってやりにくさがあると考えられるが、この地域では消防団も合同であり、団員を育成会と同じ若手メンバーが兼ねていることもあって日頃から連携が取れているとのことであった。

両氏によると、地域行事を続けるポイントとしては、「段取りは慣れた人が進めること」、「参加する人が楽しむこと」、「慣れている人が積極的に関わること」、「地域への愛着」であるという。また、上からの押し付けで「きつか感」が出ると参加者が少なくなるため、飲み会などを通じて世代間の交流を図り、若い人にも参加する意味や楽しさを知ってもらうことが重要であることを確認した。

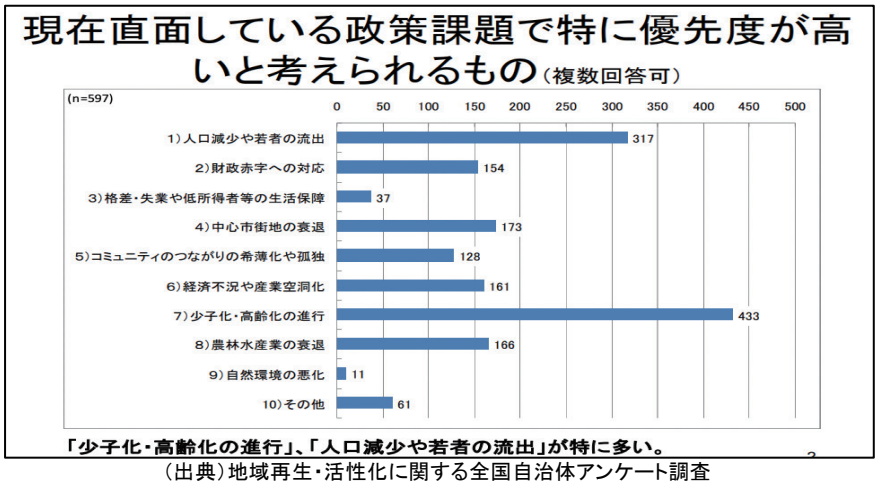
11 月 7 日　紺屋町町内会ヒアリング

第８章　考察

8.1　地域コミュニティの課題

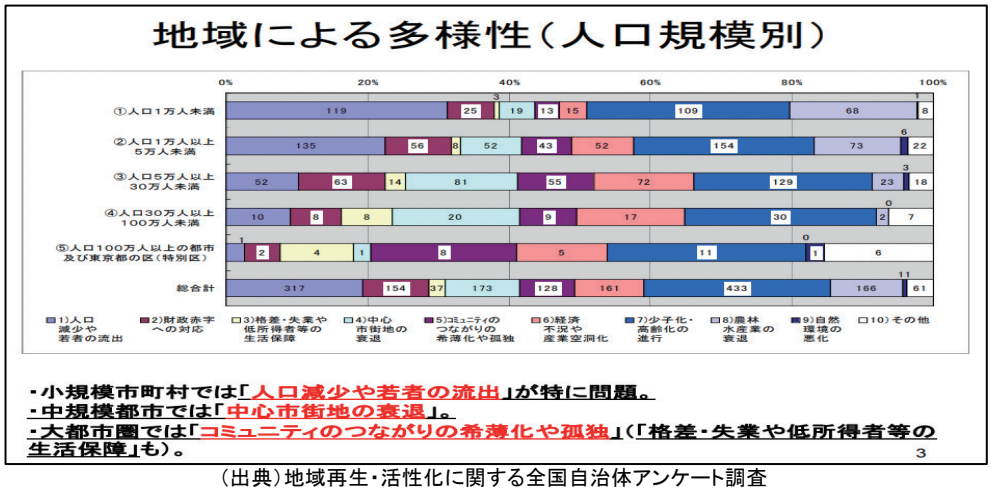
コミュニティにおける課題は、地域によって、特に人口規模によって異なることが指摘されている（広井 2019）[12]。2010 年に実施された「地域再生・活性化に関する全国自治体アンケート調査」[13]によると、「現在直面している政策課題で特に優先度が高いと考えられるものは何か」という質問において、第 1 位は「少子・高齢化の進行」、第 2 位が「人口減少や若者の流出」となっている（図 13）。他方、自治体の規模別の課題では、規模の小さな自治体では「人口減少や若者の流出」、中堅の 5 万人から数十万規模の地方都市では「中心市街地の衰退」、大都市圏で目立つのは「コミュニティのつながりの希薄化や孤独」となっている（図 14）。このように、地域コミュニティの課題と言っても地域によって違いがある。

図 13



（出典）地域再生・活性化に関する全国自治体アンケート調査

図 14



（出典）地域再生・活性化に関する全国自治体アンケート調査

---

12 参考：「人口減少社会のデザイン」（広井良典著・東洋経済新報社・2019）92-94 頁

13 参考：地域再生・活性化に関する全国自治体アンケート調査　https://www.env.go.jp/content/900496000.pdf

8.2　人吉市における地域コミュニティの課題

地方都市の一般的な課題は「少子・高齢化の進行」や「人口減少や若者の流出」であり、人吉市の現状と合致している。さらに人吉市では豪雨災害で被災した建物の解体が終わり、復興まちづくりに向けた土地区画整理事業が市内各地で進められており、仮の住まいで生活をされている方も多い。また、被災によって鉄道が運行休止となっている点も学生の進路選択にとって非常に大きい問題であり、本来なら鉄道で通学できていた者が他地域の高校の寮に入ったり進学のため家族で市外に転出したりするなど、人口流出の新たな要因となっている。このような状況のため転居を余儀なくされて地域住民が離散し、結果として町内会の活動が思うようにできなかったり、被災者から会費を集めるのが困難であったりする町内もある。

町内会への聞き取り調査を通して確認できた人吉市の地域コミュニティにおける一番の課題は「マンパワー不足」である。この要因として第１に「地域の担い手の減少」、第２に「住民の関心の低さ」という問題が考えられる。

第１の要因について、地域コミュニティ運営の中心となる人は定年退職後の「高齢者」が多い。人吉球磨地方には地元に大学がないためほとんどの高校生は進学のため他地域に転出することになり、雇用の場も少ないため生まれ育った地元に住みつづける者や地元に就職して帰ってくる者は少ない。結果として地域に若者が定着せず地域の担い手が不足することになり、地域行事や清掃活動に参加するメンバーが固定化して参加者が集まらない状況にある。根本的な解決策としては地元に若者が地域に定着するよう受け皿となる雇用の場を創出することであるが、人吉市では企業誘致に積極的に取り組んでいるものの中々ハードルは高い。そうであれば若者が他地域に転出することを前提として、地元と何らかの関わりを持ち続けるような関係性を築いておくこと、またはいずれは地元に帰って来たいと思わせる動機付けが必要であろう。

第２の要因について、人吉市において住民同士のつながりは他の都市部と比べると強いものと考えられる。我が国には、自助・共助・公助という考え方があり災害等の非常時にはお互いに助け合う関係性が重視される。この「共助」の部分を担うのが町内会である。令和２年７月豪雨で集落全体が浸水し甚大な被害を受けた人吉市中神町大柿地区では、57 世帯 123 人の住人のうち 1 人の死者も出さなかった。これは住民が声をかけ合って速やかに安全な場所に避難したからである。同地区では日頃から住民間の交流活動が盛んであり、地域コミュニティの関係づくりの良い例であろう[14]。災害に対する備えとして、大柿地区の事例のように住民同士の顔が見える関係づくりを日常から行うことが必要である。このことは災害等の緊急時だけでなく、防犯や子育てなど安心して生活できる地域づくりにもつながる。地域コミュニティに対する関心を高めるためには、世代を超えて住民同士の交流の機会を設けることが重要である。町内会へのヒアリング調査では、地域行事を行わないことにより住民のつながりが希薄になることを懸念する声があった。地域行事は地域の活性化にとっては必要不可欠であり、地域行事を企画・運営する地域コミュニティにおいて調整役となるリーダーの存在が鍵になると考える。

[14] 参考:2020 年 7 月 25 日人吉新聞　「被害甚大も死者なし　早期避難に「共助」の精神」

8.3　地域コミュニティ活性化の方策

地域コミュニティ活性化のためには、「マンパワー不足の解消」と「地域に対する住民の関心を高めること」が必要である。今回の研究活動において人吉高校の高校生が「まちの市を復活させる」ことを提案した。地域の歴史を踏まえた素晴らしい着眼点であり、高校生らしいアイデアである。ただし、松岡市長から指摘があったとおり、課題は「誰がやるのか」という点にある。住民が気軽に参加できる地域行事を行うことは重要であるが、これ以上新たな取り組みを増やすことは地域の「負担感の増大」につながる恐れがある。そこで、地域コミュニティにおけるマンパワー不足を解消し、住民の交流を促進する地域行事を存続していくための解決策を検討する。

8.3.1　外部人材の活用

町内会で地域行事を行う場合、企画立案や準備、当日の運営はその町内の住民である町内会の役員が中心となって実施される。紺屋町の事例では、「段取りは慣れた人が進める」ということであり、経験が浅い者や顔見知りでない者が関わるには少々ハードルが高いように思われる。このような事情により町内会活動に関わる人が限られてくるとスタッフが固定的になり、次第に「役員に任せておけば良い」という雰囲気が生まれ、地域住民の当事者意識が薄れていくおそれがある。今回七日町の地域行事に参加して気づいた点は、役員以外に清掃活動等への参加者が少なかったことである。ここに高校生が加わったことで作業の生産性が向上するとともに、若者が参加することによって地域の方にも活気が出てくる（実際に予定より早く清掃が終了した）。そのためには、高校生や大学生を地域行事に巻き込む工夫が必要であり、行政としては地域と学校を結びつけるコーディネーター的役割が期待される。しかしながら、学校現場も行政も業務量は年々増大しており、特に人吉市においては豪雨災害からの復興が最重要課題であり他に手が回らないのが現状であろう。

そこで「地域おこし協力隊」制度[15]を活用し、「学校・地域コーディネーター」として学校と地域を繋ぐ人材を外部から招き入れればどうか。「地域おこし協力隊」は都市住民が自治体からの委嘱を受けて過疎地域等で生活し、地域おこし等の活動を行う、いわば若者の移住定住策である。いわゆる「ヨソモノ・ワカモノ」が地域に関わることで地域での化学反応が期待できる。

地域おこし協力隊の事例として、茨城県筑西市では「若者と地域のチャレンジを繋ぐ地域コーディネーター(図 15)　」として隊員を募集しており、岩手県釜石市では高校に配属され地域課題の解決に取り組む隊員を募集している。「学校・地域コーディネーター」の役割としては、行政・地域・学

（図 15）茨城県筑西市の取り組み

（出典）移住・交流推進機構（JOIN）ホームページ

[15] 「地域おこし協力隊」とは人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行なってもらい、その定住・定着を図ることで、意欲ある年住民のニーズに応えながら、地域力の・維持強化を図っていくことを目的とした制度です。（出典：移住・交流推進機構ホームページ　https://www.iju-join.jp/chiikiokoshi/about.html）

校を繋ぐ窓口となること、町内会の行事等の運営にも参画すること、町内会や学生と連携してイベントを企画立案･運営すること､地域の情報発信が想定される｡期待できる効果は、町内会のマンパワー不足の解消、学生の地域への愛着、若者の移住定住促進である。外部人材（若者）の活用によって、町内会運営に係る負担を軽減するとともに、イベントによって地域を活性化し、学生等を地域に巻き込むことが可能になると考える。

8.3.2　町内会の連携、地元企業等との連携

町内会におけるマンパワー不足を解消するためのもう一つの方策としては､町内会同士の連携が考えられる。おくんち祭の子ども神輿では、神輿を担ぐ子どもがいないという事情があるにしても、紺屋町・鍛冶屋町・九日町の各町内会が連携して神幸行列に参加した。地域行事に関しては、今年度完全実施できたのは鍛冶屋町だけであり、人口減少や高齢化のますますの進展により運営側の担い手不足のため単独の町では実施していくことが困難になることが懸念される。他方で 7 町はそれぞれ近いエリアに隣接しており町内会同士の交流も盛んであるため十分連携は可能であると考える。例えば、夏祭りについて神事はそれぞれの町内で実施して、福引や出店等のイベントについては紺屋町の人吉復興コンテナマルシェ（跡地）などを会場として、地元企業にも参加を呼びかけ共同で開催してみてはどうか。規模が大きくなることで参加者の増加が見込まれるうえ、共同開催によって運営側の負担は軽減されるものと考える。

第９章　結論

今回の研究により、令和 2 年豪雨災害は被災地の住民生活に大きな打撃を与えただけでなく、住民の流出等により地域コミュニティ活動にも影響があったことがわかった。人口減少が重要課題となっている人吉市にあって、災害はその進展を 5 年 10 年早めてしまうほどのインパクトがあったと考える。町内会長のヒアリング結果からも、今後地域はますます「担い手不足」の問題に直面することが確認された。この問題を解消するためには、外部人材の活用と町内会同士の連携が必要だと考える。さらに町内会同士の連携を進めていくと、町内会の共同運営や合併等も視野に入れておく必要があろう。非常時の共助の備えとして地域コミュニティの維持存続は重要な問題である。行政としては地域コミュニティが機能不全に陥る前に、地域コミュニティの担い手確保や町内会同士が連携しやすい仕組みを検討する必要があると考える。また、高校生は地域の問題に対し積極的に取り組みたいという姿勢があることも分かったので、彼らが「地域で、楽しみながら活躍できる機会」を設けることにより将来地元に貢献できる人材の育成につながるものと期待する。

謝辞　今回の研究活動にあたり関係者の調整にご尽力いただいた人吉市地域コミュニティ課の皆様、調査にご協力いただいた七日町、五日町、二日町、九日町、大工町、紺屋町、鍛冶屋町の町内会の皆様、共同研究にご理解ご協力いただいた人吉高校の先生方、資料をご提供いただいた國學院大學黒﨑浩行教授に深く感謝申し上げます。また、一緒に研究に取り組んだ人吉高校 3 年生 6 人と高濵研究室の学生にも敬意を表します。

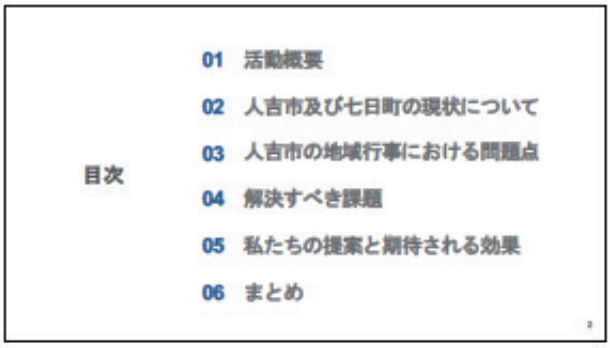
（参考文献）
○2015 年度国土交通白書（国土交通省） 21 頁
○「地域コミュニティに関する研究会報告書（令和 4 年 4 月）」（総務省） 1 頁、
○「町内会活動の手引き（令和 4 年 5 月 26 日版」（人吉市地域コミュニティ課） 1 頁、13 頁
○「自治会等に関する市町村の取組に関するアンケート」（総務省） 3 頁
○「街道をゆく 3 肥薩のみち」 司馬遼太郎著・朝日文芸文庫 100 頁
○人吉市人口ビジョン（平成 27 年 10 月人吉市） 1 頁
○「令和2年豪雨による被害状況等について（令和 3 年 1 月 7 日 14 時 00 分現在）」（内閣府） 1、2、8、9 頁
○「熊本県万能地図(震災復興特別版)」 熊本日日新聞社 157 頁
○「目で見る 球磨・人吉の100年」 郷土出版社 115 頁
○「第2回令和2年球磨川豪雨検証委員会説明資料」（国土交通省九州地方整備局・熊本県）
○令和元年人吉市統計年鑑（第33回）「町内別人口・世帯数（住民登録）」（人吉市市民課）
○令和3年人吉市統計年鑑（第35回）「町内別人口・世帯数（住民登録）」（人吉市市民課）
○「広報ひとよし」平成 30 年 7 月号
○「人吉のまつり～春夏秋冬・四季の楽しみ～」 人吉市教育委員会 8 頁
○「神道文化の現代的役割 地域再生・メディア・災害復興」 黒崎浩行著 64 頁
○「人口減少社会のデザイン」 広井良典著 92、93 頁

（新聞記事）
○2020 年 7 月 5 日熊本日日新聞（抜粋）「県南豪雨 球磨川氾濫」
○2020 年 7 月 15 日熊本日日新聞（抜粋）「人手不足 復旧長期化も」
○2020 年 7 月 25 日人吉新聞（抜粋）「被害甚大も死者なし 早期避難に「共助」の精神」
○2020 年 8 月 22 日熊本日日新聞（抜粋）「県、11 月に復興プラン」
○2020 年 10 月 4 日熊本日日新聞（抜粋）「おくんち祭 今年も 神幸行列は中止」

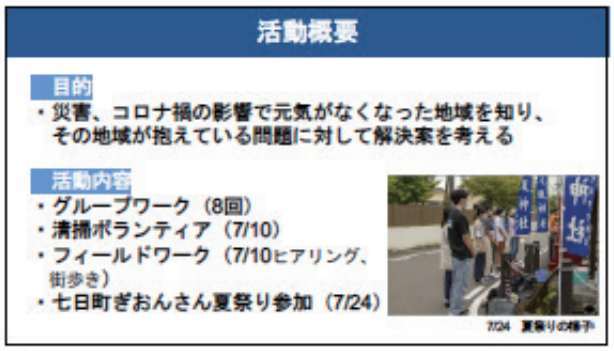
（ホームページ）
○長崎県ホームページ 「地域コミュニティとは」
https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kurashi-kankyo/sumai/community/imi/
○「令和2年豪雨災害からの復旧・復興プラン」（熊本県）
https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/206/70794.html
○青井阿蘇神社ホームページ 「おくんち祭」
https://aoisan.jp/about/matsuri/
○地域再生・活性化に関する全国自治体アンケート調査
https://www.env.go.jp/content/900496000.pdf
○移住・交流推進機構（JOIN） ホームページ
https://www.iju-join.jp/chiikiokoshi/about.html

（参考資料）人吉高校生徒による成果報告会資料

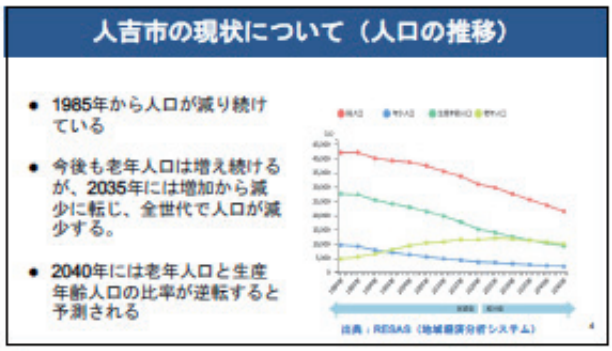
1



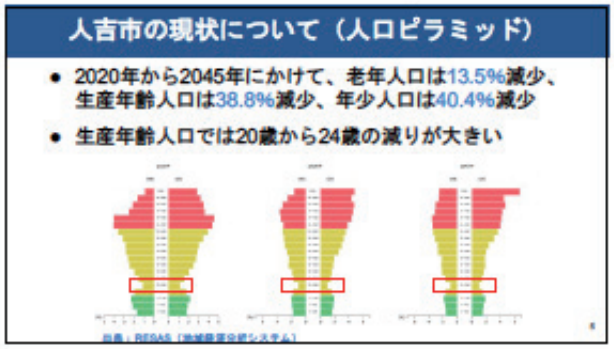
2



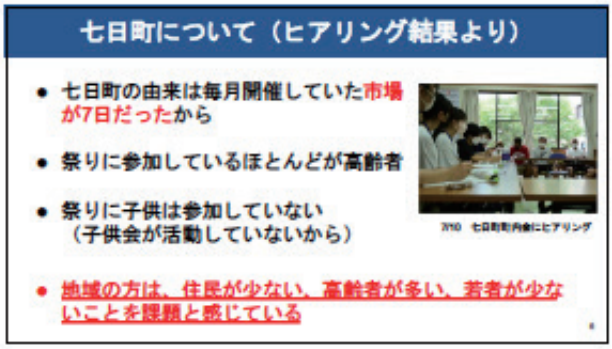
3



4



5



6

人吉市の地域行事における問題点

① 少子化により、地域行事の運営を手伝える若者が少ない

②人口減少により、地域行事の担い手がいない

③コロナ禍によって地域行事が行えない

④人吉市でどんな地域行事が行われているのかを知らない人が多い

7

解決すべき課題

①少子化 → 若い人達が参加しやすい環境をつくる
（例）子どもや若い世代がメインの行事

②人口減少 → 他の地域と一緒に行事を行う

③コロナ → コロナ禍でも行える地域イベントを思案する

④PR不足 → 広告やインターネットを使って宣伝をする

8

私たちの提案

まちの市を復活させる！

- 七日町の由来は毎月開催していた市場にあるため
- 住民の交流の場を作ることができるため
- 街の人の一つの楽しみにしてもらうことで元気な町にするため
- 高齢者だけでなく幅広い年齢の方に来てもらうことができるため

9

具体的な実施内容

- 町内の方が中心に、月に一度町内を変えながら市を開く
- 歴外の公園を利用して地域の方が交流できる場で行う
- 地域の方がどんなものでも持ち寄ってフリーマーケットを開催する
- 集まった資金は、町の復興金に使ってもらいたい
- 高校生はSNSを使った宣伝を行う
- 中高生からボランティアを募る

10

（参考事例）

【 ふ～どフェスタ 】

場所 ： 青井阿蘇神社
開催年 ： 2018年
出店者 ：

- フリーマーケット
- ハンドメイド、工芸品
- 地域農産品、加工品　の方々の参加

11

期待される効果

- 人吉市の中心市街地においての「市」が過去の出来事ではなくこれからも受け継がれていく
- 地域の方同士の交流の場が増える
- 町外の人との交流が活発になる
- 地域と地域の子供が関わる機会となり子供達の地域愛が深まる

⇓

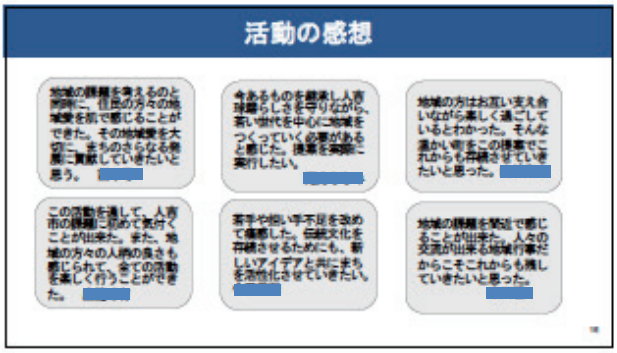
地域コミュニティの活性化

12

13

14

15



16

17

※生徒氏名は、マスキングしています。